

# 茨木・薬王寺蔵薬師如来坐像について

桑野 梓

## 1. はじめに

茨木市に所在する薬王寺は、西国三十三所観音巡礼、第22番札所として知られる、総持寺の北東に位置する浄土宗寺院である。薬王寺所蔵「薬王寺縁起」によれば、行基を開基とし、薬師如来を本尊として開創されたが、総持寺が建立された寛平2年(890年)に再興された寺院であるという。昭和33年(1958年)までは、近世に建てられた宝形造の薬師堂を本堂としていた。その後、本堂新建に伴い本尊を阿弥陀如来立像とし、薬師如来坐像は、別棟の薬師堂に新たに安置されることになった。

さて、薬王寺薬師堂は総持寺東門から奥院(現・総持寺霊園)へ向かう道沿いに面しており、本尊の薬師如来坐像のお姿を格子戸の向こうに垣間見ることができる。これまで、度々拝見していたが、今回実見する機会を得ることができたため、調査をさせていただいた(註1)。ここで簡単な紹介したい。

## 2. 像の概要(図3~16)

像高は83.0センチメートルを測る、等身の像である(註2)。まずは形状から述べる。

### [形状]

螺髪粒状彫出。髪際32粒、地髪部6段、肉髻部8段にあらわす。白毫相・肉髻珠(ともに水晶製)をあらわす。眉、髭、黒目、眼の輪郭を墨であらわす。彫眼。耳朶は環状貫通とする。三道を彫出する。衲衣、裙を着ける。衲衣は背面を覆い、右肩に少しかかって右腋下を通り、再び左肩にかかって端を背面に垂らす。左足にかかる衣が、正面で舌状に垂下する。右手は屈臂し、掌を前に向けて第3、4指を軽く曲げ、左手は掌を上に向けて薬壺を執る。蓮華座上に結跏趺坐する。

### [品質構造]

頭体幹部は前後に割矧ぐかとみられる。頭部は両耳後ろを通る線で前後に割矧ぐか。両肩以下を別材製とする。右肩以下は臂、手首で矧ぎ、左肩以下は、左右2材かと思われる。左前膊を別材とし、脚部材に載せる形とする。左手首から先を差

込み矧ぎとする。左腰脇に三角材(左右2材)を矧ぐ。両脚部は横1材製とする。裳先を別材製とする。薬壺は別材製(木製)とする。像底に1材製と思われる底板を貼り、中央に上下スライド式の扉を設ける。表面仕上げについては、肉身は漆箔とし、衣部は赤色を含んだ古色仕上げとする。薬壺は漆箔の上に緑青を塗る。像底には布貼りを施す。

### [保存状態]

表面と像底の仕上げ、以上後補、右手首から先については、後補かと思われる。

## 3. 作風と造立時期

本像は顔を見ると、半眼で、目尻を細くして軽く上げている。また、目の長さ(横幅)が左右で異なっている。眉は眉山を中央寄りにしてなだらかにつくり、口を小さくつくって口元を引き締める。目や鼻など、顔の各パーツが全体に中央やや右寄りにつくられている。耳は側面からみると上端が正面髪際よりも上にあり、縦に長くつくられていることがわかる。体軀はすっきりとした印象で、側面からみると胸の厚みは薄く、腹にややふくらみを持たせ、緊張感を解いた座姿勢である。体軀は正面からみると、首の中央線と胸の中央線の位置がずれているようにみえる。これは、胸下の括り線が、右胸が大きくつくられていることに起因するとも思われる。膝の高さはあまりなく、起伏も少ない。全体に彫りの浅い衣文線や緊張感を解いた座姿勢など、定朝様にのっとりとした穏やかな作風であるといえる。作者については、定朝様を受け継いだ仏師の作であるものの、京都で活躍した院派や円派の作風とは異なるものである。また顔の造作のゆがみや、体部の中心線のずれは、平安時代中期から鎌倉時代の作例にしばしばみられることから(註3)、これも本像の制作時期を特定するてがかりとなる。全体にバランスがよい一方で、表現にやや硬い印象があることから、平安時代、12世紀前半から半ばの作であると考えられる。

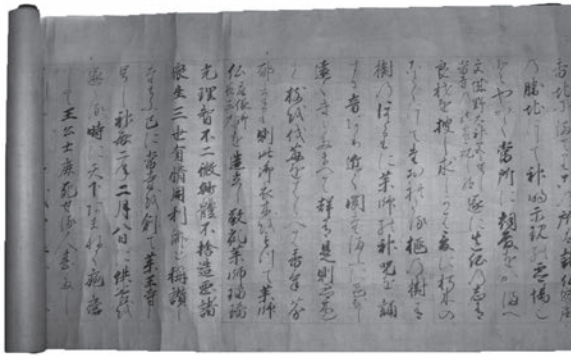


図1 薬王寺縁起（部分）薬王寺蔵

#### 4. 伝来について

さて、冒頭に触れた薬王寺所蔵「薬王寺縁起」は、薬王寺の開創からの縁起が記される。同縁起によれば薬王寺は、行基が伊勢に詣でた際に摂津の国に霊地があると神託を受けた地であり、行基はこの地で祠殿をかまえ、その後造仏の志をたて、榎の霊木を使って薬師仏を造立した。この薬師仏は「座像御長三尺」とであると記されている（図1）。像高は本像とほぼ同一である。また続けて、藤原山蔭の総持寺開創の話に触れたうえで、薬王寺の前身は東院といい、総持寺が建立される寛平2年

（890年）に再興された寺院であると記載される。加えて、山蔭の息女が難産に際して薬師仏に祈ると、安産であったというエピソードも記される。本縁起は阿闍梨栄鑑が永禄5年（1562年）に書写したものと伝えられる。

薬王寺は、『五畿内志（摂津志）』（享保年間・並河誠所編）には、永禄5年の建立とある。このころに薬王寺が再興されたものとも考えられる。また、行基開創の寺院と伝えられるが、総持寺と強く結びついたエピソードや、東院という前身寺院の名前からみても、総持寺の子院から発展したとみるのが穏当であろう。

ところで、江戸時代、承応元年（1652年）の総持寺境内図（総持寺蔵）によれば、総持寺は広大な田畑を有していたことがわかる（図2）。本堂を中心とした現在の総持寺にあたる場所は本図の下方にあり、薬王寺は●の印をつけた部分になる。東院の名は見当たらないが、左上に「薬師院屋敷」という記載がみられるのは注目される。縁起に記載されるとおり、永禄5年に薬王寺が存在していたとすると、本絵図が描かれた時点で、す

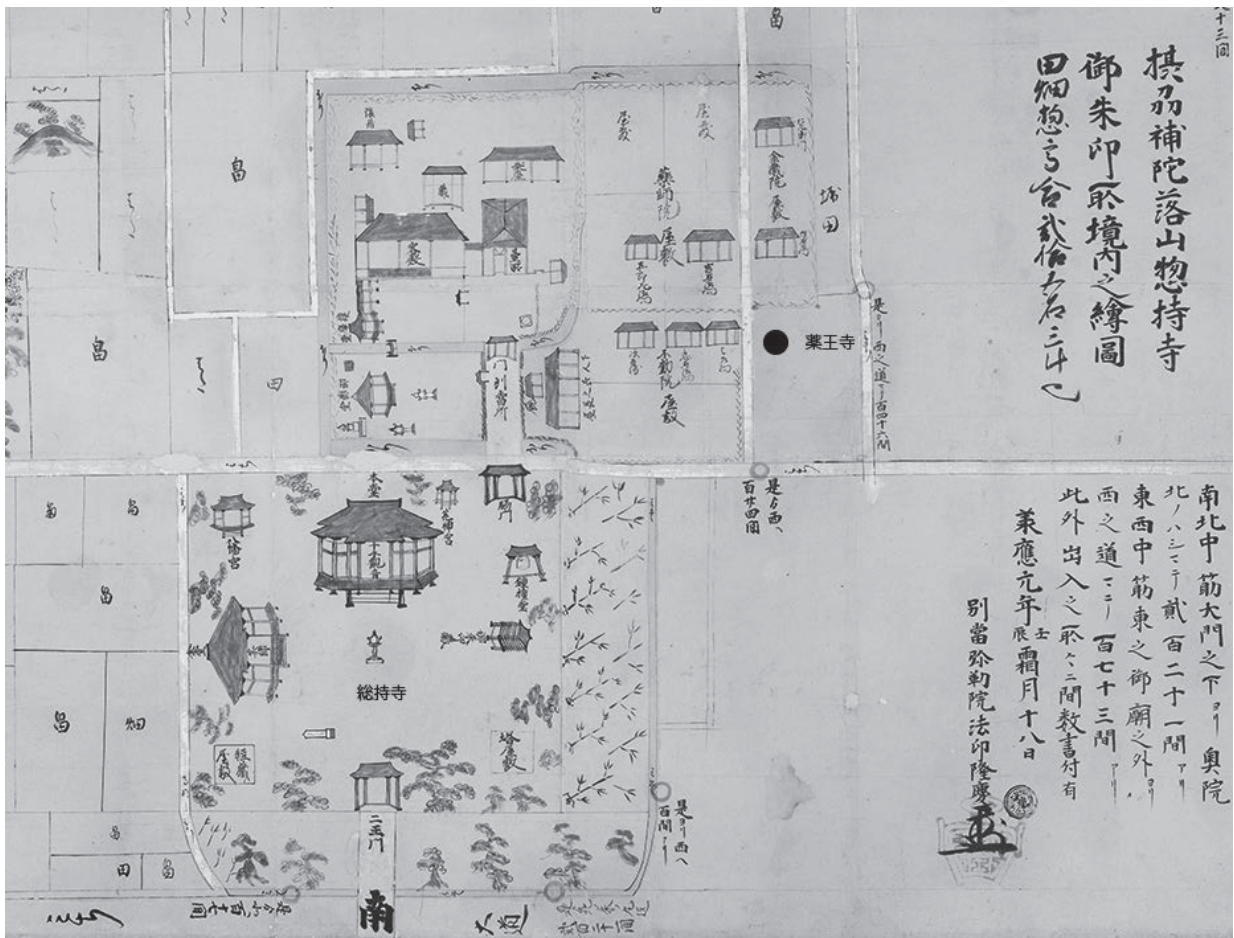


図2 承応元年（1652年）総持寺境内図（部分）総持寺蔵

で存在していたのであるが、絵図上にその存在は確認されない。平安時代の像である本像は、可能性としては、総持寺の子院などに安置されてきた像であり、薬師院や総持寺との縁の深い像であることが想像される。

## 5. おわりに

以上、薬王寺薬師如来坐像について、基本情報の紹介と、伝来について検討を加えた。その結果、本像の伝来については、総持寺のいずれかの子院などに伝わった可能性があることについて言及した。しかしながら、確証は得られなかったため、薬王寺縁起の成立時期も含め、今後も引き続き検討を続けたい。

総持寺には、開創当時、9世紀の本尊秘仏千手観音菩薩立像のほかに、11世紀後半と思われる二天像や、鎌倉時代末頃の作と思われる薬師如来坐像などが伝来する。その中であって本像は、茨木市内でも数少ない平安時代の彫刻として、また総持寺周辺に伝わる古像として、今はなき総持寺の子院や坊の存在の可能性を伝える貴重な像であるといえる。

## 謝辞

調査にあたっては、薬王寺住職の川久保幸則師、川久保きよ美師に多大なるご協力ご高配を賜りました。また、図2の掲載にあたっては総持寺中西隆英師にご快諾を賜りました。ここに記して感謝申し上げます。

## 註

1) 調査は令和3年(2021年)7月1日に薬王寺にて実施した。調査参加者は、藤岡穰(大阪大学大学院教授)、寺島典人(大津市歴史博物館学芸員)、見学知都世、柘植健生(以上大阪大学大学院生)、下内大輔(大阪大学学生)(以上、敬称略)。写真撮影は寺島氏が行い、薬師如来坐像の写真については、寺島氏撮影のものを使用した。

2) 法量の詳細は以下のとおり(単位:センチメートル)。

像高 83.0

髮際高 73.6

頂一顎 26.9

面長 17.5

面幅 16.2

面奥 20.7

耳張 21.0

胸奥(左) 21.1

(右) 20.1

腹奥 25.8

臂張 27.3

膝張 66.3

坐奥 45.8

膝高(左) 12.5

(右) 12.9

3) 寺島氏のご教示による。

## 参考文献(五十音順)

茨木市史編さん委員会 2008『新修茨木市史 第9巻 史料編 美術工芸』pp. 2-31

茨木市立文化財資料館 2018『総持寺』展図録



图3 薬王寺 薬師如来坐像（全身正面）



图4 薬王寺 薬師如来坐像（全身左斜側面）

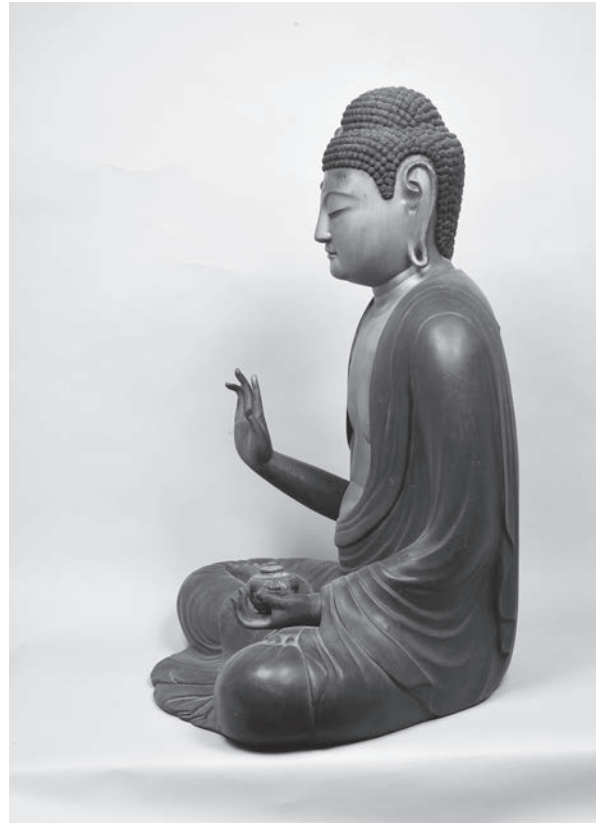


图5 薬王寺 薬師如来坐像（全身左側面）



图6 薬王寺 薬師如来坐像（全身背面）

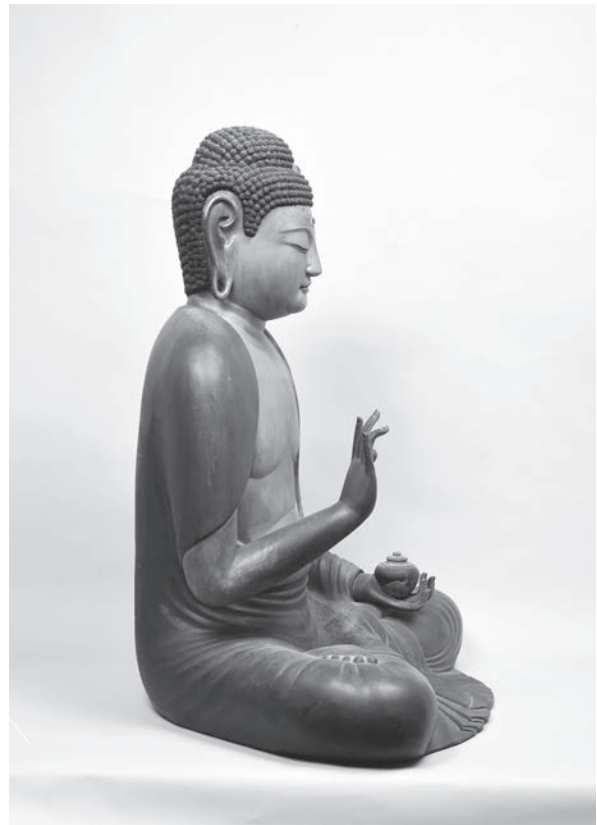


图7 薬王寺 薬師如来坐像（全身右側面）



图8 薬王寺 薬師如来坐像（全身右斜側面）



图9 薬王寺 薬師如来坐像（頭部正面）



图10 薬王寺 薬師如来坐像（頭部左斜側面）

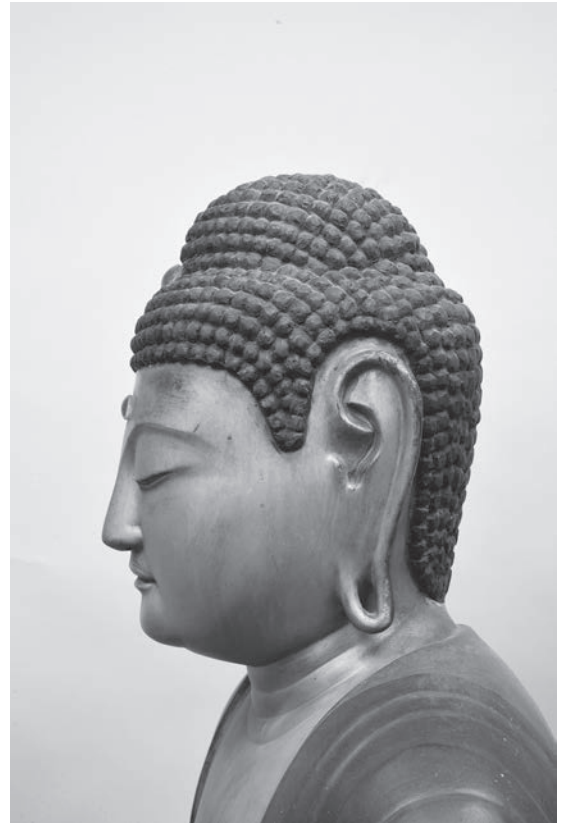


图11 薬王寺 薬師如来坐像（頭部左側面）



图 12 薬王寺 薬師如来坐像（頭部背面）



图 13 薬王寺 薬師如来坐像（頭部右側面）



图 14 薬王寺 薬師如来坐像（頭部右斜側面）



图 15 薬王寺 薬師如来坐像（脚部正面）



图 16 薬王寺 薬師如来坐像（像底）